

徳泉寺報

公開同朋会

No.009

発行
平成30年7月

発行元 徳泉寺

仙台市宮城野区
榴岡3-10-3

(022) 297-4248

ご報告

毎月、第二土曜日の一時から行っている同朋会。七月の同朋会は「公開同朋会」と称して、より広くご縁のある方々にご案内して開かせてもらっています。

まず、お配りした赤いおまじりの本を見ながら、一緒に声をだしてお勤めをします。真宗のお勤めは歌のように節があるので、徐々に慣れてくると、大きな声がお堂に響いていました。

その後、住職、前住職からの法話。仏教の視点から私たちの生活、生き方をたずねるようなお話です。

お話の後は茶話会。ここが毎度、盛り上がるのですが、それぞれ感じたことやお互いのことなど、お茶をしながら賑やかに語られます。集った人同士が、お知り合いになつていく。そんな場になつていければと思っています。



本堂の阿弥陀さま



「いのち」ってなあに？



お茶っこ

住職法話 『いのち、およばずとも』

愛知の方言ですけど、お年寄りが「歳をとって間に合わなくなつて」と嘆いておられました。常に時間的にも能力的にも「間」に「合う」とが求められるのが、私たちの仕事や生活の場なのかもしれません。それに対して「そのままでもいい、ありのままでもいい」と仏教はいいます。そのことは大きな救いですが、それでも自分自身に納得できない、間に合わない自分を受けとめきれないのが、私たちではないでしょうか。ほとけさまは、そんな私たちを撰取不捨（せつしゅふしゃ）、選ばず、嫌わず、見捨てずに寄り添ってくれるのです。

前住職法話 『命日（いのちのひ）』

命日とは「いのちのひ」と読みます。今は亡き大事な方からどのようなことを教えていただいたのか、私たちはいのちをどのように生きているのか、たずねていく日なのではないでしょうか。

私たちのこのいのちには限りがあります。そして、そのいのちは他のいのちをいただいて生きています。また、多くの方々のおかげを蒙って生きています。そのことを決して忘れてはいけないのだと思います。だから「おかげさま」「ありがとう」と手を合わせるのでしょうか。いのちを引き継いでいく責任と、根底にある願いに気づいていくことが大切なのです。